

フライフィッシングのメッカ

日本でのフライフィッシングは 1890 年代初頭に奥日光で始まったが、これは中禅寺湖で夏を過ごした外国人の影響が大きい。スコットランドの商人トーマス・グラバー（1838-1911）が 1889 年に初めて湖で釣りをし、1893 年には大崎地区の中禅寺湖畔に家を建てた。彼はイギリス式フライフィッシングを地域に紹介し、また、フライフィッシングに適した魚、特に様々な種類のトラウトを湖や湯川にストックすることに尽力した。1902 年にはコロラド州からカワマス（ヤマメ）の卵を輸入し、孵化した魚は湯川に放流された。残念ながらその年の後半の激しい嵐で全滅したが、1904 年に 2 回目の放流がされた。

奥日光のフライフィッシングは、夏の間、外務省が中禅寺湖の湖畔に放流していた時代から始まり、現在では年間を通して人気のある釣りとなっている。

右上の写真はグラバーの大崎の湖畔の家。その下には、グラバーと大島久治が 1898 年（明治 31 年）頃に撮影された写真で漁獲物を手にしている。

* * *

東京アングリング & カントリークラブと西六番山荘

グラバーが 1893 年に建てたこの家は、通称「西六番園地」と呼ばれていた。1927 年にハンス・ハンターがグラバーからこの家を買取り、2 年前に設立した東京アングリング & カントリークラブの本部とした。このクラブは、レクリエーション・フィッシングの中心地であると同時に、20 世紀初頭に中禅寺湖で夏を過ごした外国人や外交官のコミュニティの重要な社交の拠点でもあった。会員には皇族や財閥のトップも含まれており、日本の国際外交にも大きな役割を果たしたと言われている。西六番の家は 1940 年に焼失したが、レンガ造りの暖炉が残っており、敷地は公園になっている。

左上は、大崎の西六番別荘の位置を示す縮尺 25,000 分の 1 地形図。

中央左は西六番別荘。

その下には、修復のために作成された物件の間取り図がある。